



# 診療室の午後

白浜はまゆう病院  
泌尿器科部長 川嶋 秀紀

病気はいろいろなものであ

る。特にがんの場合、命にかかわるだけでなく、中には手術により、がんが侵された臓器を摘出して体の機能に不自由が残る場合がある。出会った患者さんたちは皆いろいろな気持ちの中で、病気を現実として受け入れ、状況を正しく理解し、最も適切な治療を受ける決心をされ、前向きに歩んでおられる。いつも頭が下がる思いで敬意をもって接している。患者さんたちはみな素晴らしい人たちである。医師になって30年以上たつが、この間振り返れば、「QOL(quality of life:生活の質)」「や」「説明と同意」といった言葉に表されるように受益者である患者さんの人権に対する、医療サイドからの意識が高まってきている。接遇マナーの研修を行っている病院もある。それ自体は大切なことであるが、形式的であり実体を伴っていないようにも感じる。同意書といった書類の数も増えてきていて、患者さんが読んで理解するように大

えてきているようだ。しかし、効率と利益優先の体制に私たちの体が何処まで順応するのだろうか。

さらに、昨今の大学医学部の教育は、短期的なニーズに合わせた職業教育を重視するあまり、振り回され、迷走しているようにも見える。本質を忘れた制度の急な構築は脆弱(せいじやく)であり、そのツケが回って来ないことを願う。

この2年4カ月わたる連載で、四季の移ろいのままに筆をすすめ、読者の皆さまの心の中に小さな風が立つことを願った。その中で、医療や医学教育や医学研究についての私のささやかな経験や意見をずっと投げかけて

## 〈58〉「共有の財産」

学会、製薬会社や医療機器メーカーも含めた医療の世界は、一般の人が足を踏み入れ難いと思う。そのため、に恣意(しい)的である種の独善性があるのではないだろうか。だとすれば受益者は受け身のままである。また、医療を経済的な観点からとらえ、医療をビジネスと考える人たちも増す。

きたつもりである。それは、受益者が、この国の医療をもっとよく知って皆の財産として主体性を持って共有することが、医療の将来のため何にも代え難いと信じているからである。長い間の愛読をお礼申し上げますとともに今後ともよろしくお願ひ致します。(おわり)

かわしま・ひでのり 1957年生まれ。1984年に大阪市立大学医学部を卒業し、91年に同大学助手。93年に米国ベイラー医科大学、94年に米国テキサス大学医学部に留学。2002年大阪

市立大学講師、07年同大学准教授、14年より現職。日本泌尿器科学会専門医・指導医、日本内視鏡外科学会泌尿器腹腔鏡技術認定医、日本がん治療認定医機構がん治療認定医。